



○晴耕雨読

5/11 分校の農業体験(田植え)の様子⇒

図書館だよりの発行にあわせ、本・読書について書いてみました。

高校時代、一番成績が振るわず苦手だったのが国語でした。大学受験に失敗した時に、1年間はニュース以外のテレビ番組は見ず、その時間を読書に充てる誓いを立てました。といっても、そう簡単に本を好きになれるものでもありません。そこで、小学生のころ読んで面白かった



『ぼくのおじさん』の著者北杜夫の本を読むことにしました。なかでも読み入ったのが『どكتورまんぼう青春記』でした。戦中戦後の過酷な時代の学生生活の話なのに、なぜかこの小説を読み終えた時には、大学生になりたいという気持ちが自分の中で強くなっていたことを覚えています。これがきっかけで、北杜夫の著書をすべて読みました。夏頃には、受験勉強を怠ける口実に本を読むくらいになっていました。そうなると、他の著者・著書にも興味が出始め、当時難解な評論文の出題で受験生を悩ました小林秀雄をはじめ、近現代の作家の本を週1〜2冊のペースで読みました。『アンネの日記』では、将来を夢見れることの幸せを痛感しました。新聞に連載される小説も読み、そのついでに社説や天声人語なども習慣として読むようになっていました。

北杜夫氏は10年ほど前に亡くなりました。その報を受けて、東京に行った折に、自宅(*住所非公開)付近を散策しました。再三出てくる自宅やその近隣の空気を肌で感じたいと思ったからです。散策しながら、著書を通じて、自分の生き方や考え方を、著者と、そして自分自身と対話していたのだと感じました。将来を思い悩んだ受験の時期だからこそ、いろんな先人と対話したいと思い、読書にはまったのだとあらためて思いました。

その数年前、公開されている司馬遼太郎の自宅(記念館)に行きました。20代〜40代は、歴史関係の本を読み漁ったのですが、彼の著書は避けてきました。司馬史観とも言われる彼の歴史観に引っ張られてはいけなかったからです。しかし、1冊読んだだけで、自分の歴史観のなさを思い知りました。歴史を知ることに重きをおき、一番大事な歴史から学び、そして考えることをしていなかったのです。

ここ数年は、柳美里さんの私小説をかなり読みました。人間のどろどろした部分が多いのですが、そのことで自分の内面のさらに深層とも向き合えた気がします。最近『JR上野駅公園口』が全米図書賞を受賞されたことでも話題になりました。彼女は、東日本大震災を契機に、福島第一原子力発電所に近い南相馬市に移住されています。私も震災後に行きましたが、あの時の光景は忘れることができません。

人は、なにかの解決策を求めて本を読むことがあります。でも、解決策をその本の中に見つけるのではなく、本を通して自分の中に見つけるものだと思います。

これからも、いろんな先人と対話するため、本を読み、そしてその町に出かけていければと思います。生徒のみなさんには、まずは身近な地域の歴史的な場所に行くことをおすすめします。手前味噌ですが、そんな時に(確か分校の)着任式でお話した『島根県の歴史散歩』を参考にしてもらえれば幸いです(笑)。

なお、ここで触れた本などを図書館で紹介するコーナー等を今後つくってもらう予定にしています。